



陸男の顔のすぐ前には、海水面があった。時折り、押し寄せる波のため、眼や鼻、口に海水が掛かった。その度ごとに、手で顔を拭った。冬が終わり、春となったものの、気温に比べ、海水は冷たかった。まだ、気温の暖かさが海水までには伝わっていないからだ。

陸男は、名前とは裏腹に、何故か、海中にいた。何かに誘われるように海の中に歩いて入っていたのだ。最初は、くるぶしが波に浸かり、膝、腿、お腹、胸が次々と海に浸かっていき、今は、とうとう、つま先立ちで、何とか顔を上げるのが精一杯の状態になっていた。

自分から進んで海の中に入って行っておきながら、顔を上げるのが精一杯というのも変な話だが、実際、陸男の意志を超越した力が、体全体の力が、陸男を海の中へと誘っているのだ。

陸男は、定年退職した後、再雇用という形で、元の職場で働いていた。その期限も昨日までで終わりで、今日からは、全くのフリーとなる身分であった。そんなに預貯金があるわけでもないし、年金もわずかではあったものの、何とか仕事をしなくても生活していける算段はあった。

それが、どういう訳か、朝、いつもの出勤の時間に目覚め、朝食を摂り、職場には行かなくてもいいはずなのに、車に乗り込むと、定刻の時間に家を出た。行き先はどこだ。自分で自分に問いかけるものの、その答えはない。車は自然と海の方へ向っていた。

そこは、景勝地で、岬の先端からは、いくつかの島々が見え、風光明媚な場所であった。陸男も、かつて訪れたことはあったものの、海の側の砂浜まで近づいたことはなかった。岩場の下には、砂浜が広がり、一種のプライベートビーチの雰囲気があった。岩礁の上では、釣りをしている人が二、三人いた。

陸男は車から出ると、何かに両手、両足を引っ張られるように、砂浜に向った。季節は春。入学式や入社式、人事異動、転勤など、人が動くことで、何となく落ち着かないものの、新たな門出などで、世間は華やか雰囲気があった。

仕事を終えた陸男であったが、それも会社からの卒業ということで、それなりに精神的には満足はしていた。それが、今、何故かしら海に来ていた。夏まではまだ遠く、海水はゆるんではいなかった。陸男の体温が、海水の中に全て溶け出していくように思われた。

「うっぷ。うっぷ」

つま先がほとんど海底から離れかけて、体は寄る辺がなく、ワカメなどの海藻のようにゆらゆらと揺らめいた。口の中に波が侵入した。

「辛い」

思わず口に出した。海水がこんなに塩辛いとは思わなかった。海なんて、それこそ、遙か昔、自分の息子が小さい頃に、海水浴に連れていったものの、海で泳ぐことはしないで、水辺で、息子とちやぷちやぷ水遊びや砂の城を作って遊んだとき以来だった。

それでも、海にいるというだけで、海のしょっぱさは口や肌身に感じた。それが、この歳になって、泳ぐどころか、海底を歩いて進んでいるということは、自分でも信じられなかった。

「おおい。何をしているんだ。危ないぞ」

岩礁で釣りをしている人たちから声が掛かった。陸男は、自分でも、このまま海の中に進めば危ないことは知っていた。沈んでしまう。溺れてしまう。命を落としてしまう。そんなことぐらい、この年齢にならなくてもわかる。だけど、体が勝手に、海の中に進んでいくのだから、仕方がない。

「ぺえ」

飲んだ海水を吐いた。喉が焼けるように塩辛い。これ以上は飲めない。と思うもなく、なんとか海底とつながっていたつま先がとうとう離れた。自由の身となり、かつ生命の糸が切れた。陸男はそのまま意識を失った。

この後、人々が、海の中で亡くなる事故なのか、入水自殺なのかわからない事件が、多発した。それこそ、紅葉病のように、皮膚の色が変色するなど、目に見えて、異常がわかれば、その人を隔離するなどの対策が取れたものの、この海誘い病は、見た目だけではわからず、誰彼問わず発生したため、対抗する手段がなかった。紅葉病の治癒のために海に浸かり過ぎたので、海に呼び込まれているのだ、とまことしやかな都市伝説さえ起こった。

世界政府は、まずは、都市伝説は科学的根拠のない風聞だとして全面否定するとともに、海岸線には人が乗り越えることができないほどの高さの巨大な防護壁を作り、人々が海へと入水することを防ごうとした。しかし、国土は広すぎて、どこかに隙間ができた。

また、人海戦術として、警察や消防団、地元の自治会の役員などが、海辺で見回りするなどの監視体制を敷いたものの、二十四時間、三百六十五日、それを永遠に続けることは不可能だった。そのため、防護壁の隙間を通ったり、監視の目を盗んだりしながら、人々は夢遊病者のように、海の中に消えて行った。

人々の体に発信装置を着けて、どこにいるのか、居場所を常に確認する方法も考えられたが、個人のプライバシーがあからさまになることから、保護すべき子どもなどには可能ではあったものの、いわゆる成人の人々には受け入れがたいものがあった。

人々は、相変わらず、砂浜で産卵したウミガメが海に戻っていくように、ゆっくりと海の中に入っていく。海の中に沈んだ人々は、枯葉が弱い風でも粉々になるように、体中の皮膚が海水中に溶け出していった。

これまで人口増大、食糧・資源不足、環境破壊などの課題や紅葉病対策などに対して、ヒトは進化によって克服してきたものの、また、新たな病と向き合うこととなった。

世界政府は、この現象は、ヒトにとっての最大の危機だとして、医学だけでなく、心理学、行動学など、あらゆる分野の研究者たちを結集させて、原因を追究したものの、その謎は解明できなかった。

毎日、毎月、毎年、一定の割合の人たちが、入水事故、入水自殺という名の下に、海の藻屑となっていった。その藻屑は、皮肉にも、魚やプランクトンによって消費されることで、ごみ問題の発生には至らなかった。

また、一時期、紅葉病を克服して、再び、人口が増加傾向にあったヒトは、この謎の行動の影響で、人口は現状維持に落ち着くことができた。世界政府においては、これも進化の一つであろうと、安堵していた。